

漢法苞徳塾資料	No. 281
区分	資料
タイトル	八木素萌・略歴
著者	八木素萌
作成日	1994.07

☆昭和 31 年（1956 年）恵比寿にて薬店開業・同時期に大塚敬節『漢方医学』（創元医学新書・初版、昭和 31 年 7 月刊）に接して多に感銘を受けて、漢方医学を学ぶ気になる。漢方の研究会のニュースがあると会場に足を運ぶように心掛けるがチンプンカンな思いであったことが多い。しかし、大塚敬節師の論は独習を繰り返して理解できるようになろうと努力した。

☆昭和 36 年横浜市に転居、日吉と恵比寿の 2 店、2 年後日吉の 1 店にしぼる。神奈川漢方子太郎会の主催する研究会に頻繁に出席し、石原明師の『傷寒論』講義の常連となる。清水藤太郎師・矢数道明師などの講義も受ける機会にも恵まれた。

☆昭和 38 年石原明師の推薦によって「日本東洋医学会」に入る。当時の会員は全国で 300 人にも達していなかった。この頃より石原明師に誘われて、一緒に台湾・香港などの漢方医学研究所や教育機関や著名な医家などに会いに行く。香港・九竜の「医薬学会永遠会員」（昭和 45 年）となる。

☆昭和 40 年より神奈川漢方子太郎会学術部長・理事・幹事となる、一方「温病学」があることと、その重要な意味を知り、是非研究しなければならないと説くようになる。

☆『傷寒論』には、鍼灸術による「傷寒」の治療が少なからず記述されていることから、「鍼灸」もできなければ「漢法家」としては片手落ちである点を強く意識したので、その研究を始めた。石原明師や矢数道明師などから、柳谷素霊師を軸とした鍼灸家の強力なグループがあることを聞かされていた。間中博士のことも知るようになっていた。神奈川漢方子太郎会の幹事・理事の中に「鍼灸師」が生じ「鍼灸学校」でも教鞭を取っていた程で、なるべく早い機会に、独習から離れて正式に習い「鍼灸師」資格を得なければと思うようになる。

☆石原明師は漢法医学的にキチンとした鍼灸を学ぶには、柳谷素霊師の学校に学ぶべきこと教えて下さった。この頃には、湯液家も処方をもどのように使えば良いのかと言う角度からの「口訣」主義になるよりも、漢法医学的な病理・生理・解剖などを「薬徴」とともに研究する必要があると唱えて、「古方」的なものからの脱却の必要を強く意識していた。湯液の臨床のかたわら、少しずつ鍼の研究と臨床適用に入り始める。

☆『難経研究会』を始める（昭和 51 年）……「難経」にとりつかれる第一歩以後・今日までの 18 年間に約 500 余回の通読、通釈書 30 余種類の通読と重要通釈書の比較対照の研究。

☆塾始まる（昭和 57 年 2 月）（= '1982 年）…最初は数名の小グループで無名・間も無く 20 名を越えるようになり、塾生は『実践難塾』と称するようになる。3 期生の時には 40 名を越えていた、その 6 月塾名改定の議論起こる。その末『漢法苞徳塾』に衆議一決した。以来、この塾名である。

☆昭和 53 年の頃から、夢分流打鍼を用いる時に、鍼先が体に接触するに過ぎない段階で、体がかなり大きく変化することに気が付いた、文恵師の小野流円・鍼は小児や幼児のみでは無く、勿論、大人にも幅広く応用できることを、実感しはじめていた。そして、次第に、打鍼を接触鍼として治療に運用することを試みるようになり、その頻度も少しずつ増えて行きはじめた。然し、まだ圧倒的に刺入鍼による治療や、長柄鍼による接触鍼法の治療が多かった。

5 期生の夏期合宿のおりの『塾の趣意・5 大項目』が発表された。

☆磁石療法に関するトータルな論を発表（昭和 53 年・54 年『蓬』誌、『道友』誌、『医黄集門』誌）。

☆『蓬』誌に『眼科鍼灸療法』〈夏賢閩・著、人民衛生出版社、刊〉を抄訳して連載〈'80・12～'83・4 まで 5 回〉。

☆原塾＝塾報 1 号に「損不足而益有余 是寸口脈耶 将病自有虚实耶 然 是病 非謂寸口脈也 謂病自有虚实耶也をめぐって」の発表。

☆原塾＝塾報 2 号に「三焦について」を書き、『難経』三焦論を軸にした三焦観と免疫学の最新の成果との極めて深い関連について論じた。

☆『新古典主義—経絡治療の諸問題』を発表（『医黄集門』15 号・1986 刊）、それ以後ほとんど毎号に鍼灸の臨床問題の基本的な理論部分の関する論を掲載。

18 号・脈口部での人迎気口診による経絡治療（'89）

19 号・三陰三陽—鍼灸と湯液（'90）

20 号・難経の診断方法論への示唆（'91）

21 号・玉石を混ぜない（'92）

22 号・補瀉の決定問題（'93）

23 号・ツボと五行と病因（'94）

24 号・立ち入って質問します（'95）

25 号・脈診は不得手でも経絡治療はできる（'96）

☆証討論の学会理事会の中間総括を起案し『鍼灸における証の現況について』として出版される。

☆脳梗塞にて入院（1991年）、当初1月半から2ヶ月の入院が必要、かつ後遺症が出ると思われるので、半年前後のリハビリが必要と担当医から告げられたが、発作時の妻による井穴刺絡と友人による週2回程度の鍼治療の故としか考えられない事であるが、半月の入院で済んだ。外見上の後遺症は見られない。

☆「日本経絡学会第12回学術大会」（1984年）に『難経・脈論の構造』

☆「日本経絡学会第13回学術大会」（1985年）に『難経における三焦・命門論』

☆「日本経絡学会第15回学術大会」（1987年）に『任脈の絡の問題について』

☆「日本経絡学会第16回学術大会」（1988年）に『難経の補瀉論に関して』

☆「日本経絡学会第17回学術大会」（1989年）に『シンポジウム・診断から治療へ』を司会

☆「日本経絡学会第18回学術大会」（1990年）に『シンポジウム・診断から治療へII』を司会

☆「日本経絡学会第19回学術大会」（1991年）に『特別研究発表・難経選穴論の体系』

☆『脈診法の基礎（理論と方法）－脈診表とその記入法－』を塾のテキスト用に整理して小パンフレットとした（1987年）。これは、脈状診を中心に据えたものであり、脈診はその結果を極力図示して、第三者も判断できるような表現が為されなければならないと言う主張が、土台にあるもので脈診表も付されていた。また、『簡便脈法と経絡治療』を塾内部テキスト用に、また東洋鍼灸の専修科生の参考用に作成。

☆六部定位脈法と他の種々の脈法との関連について指摘（最初は『内経』誌）、その2年前から塾内で講義している

☆簡便脈診法の提唱は（'88）であるが、実は塾内では（'87）頃から、脈診を講義していたが、六部定位脈診には大幅な改善が必要で、種々の問題があることが強く意識するようになっていて、在来の俣では不十分である事、そのためには脈状診を教えなければならないが、それが消化される為には、在来よりもかなり時間がかかるし、聴講生に多くの自習を課しないと、かなりの長期間が必要である。従って、実は、より簡便な方法で覚えやすく運用しやすい上、従来の脈法と比べれば同等以上の結果が出せる方法が、考案されなければならないという思いと結び付いていたのである。それと同時に、脈診ができなくとも、経脈の変動を把握できるので、適切な経絡運用の治療は可能であることも認識されてきていたので、これも簡便脈法と平行して講義している。

☆1986年煮鍼や燔鍼を用いて、冬に少年の踵痛による足が踏めないもの、成人婦人の同様な症状、熊ノ蜂に刺されて頭痛し発熱しているもの、などに卓効を経験、燔鍼治療の復活を唱える。(1983・87年)

☆1987年「気を感知できる手指の開発訓練法」をようやく纏めることができ、塾生に講義するようになった。工夫をこのように纏めるのに8年を要した。部分的には、塾の誕生の時から塾生に講義したが、訓練システムとして完成したと言えるのは、この時からである。

☆『医黄集門』15号は、経絡治療の50年を総括しようとする視点を、「日本古方派」の「証概念」に内包されていた問題点を問うことなく、その「証概念」を援用したこと、しかも、「五臓の証」としてそれが経絡概念に転換された形で行なわれている点にあること、このような「証概念」は「中国の概念」とは大きく隔たっているものであること、「五臓概念の証」では無く病態の本質を把握した所を表現する概念である必要があること、その点から言えば「日本古方派」の証概念も「日本鍼灸古典派」も、概念を転換する必要があること、井上雅文氏の『脈状診の研究』に見られる視点－脈状は「浮・沈・虚・実・数・遅・滑・濇」の8脈とし、それが左右の何れに所在しているのかと言う事と、それは「虚・実・冷・燥」の内傷と「風・湿・寒・熱」の外傷で診察するが「積・鬱・疝」も判断する、これらの総合的な判断から「順・やや順・やや逆・逆」のように、予後を示唆する姿において把握し、しかも、配穴型を措定できるように「証名」を樹てる－は、解決の方向を示唆している方法論への1案と見られるだろうことなどについて、それらを全体的に見合わせながら、初めて提示し論じた論文である。

18号は、数年前から塾内で講義した「簡便脈法」を説明した論文である。

20号は、病因の診察にとっての重要な拠り所を教えている『難経49難』を軸としている『難経』診断学の要点を指摘した論である。つまり、病因の把握方法の要点と臨床的運用について説明しているものである。

22号は、鍼灸治療における「補瀉」の選択基準を論じ、その基礎を為している「虚実」判定の臨床論を説明したものである。

23号は、病因に依ずる診察と取穴・配穴の原理について解説したものである。

☆「国Ⅱ」での昭和53年から昭和60年にわたる鍼臨床の経験の整理として「脳卒中の後遺症の治療」の体系を整理し提唱した(昭和60年=1985)。

☆日中学術交流大会(日本伝統医学協会主催・1991.3.3) 主題は次の通り、

『腰痛の鍼灸治療－日本 古典派鍼灸と中医学－』

中国側演者・張 洪度－上海中医学院教授、于 ・・ 副教授

日本側演者・島田隆司、八木素萌、石原克巳、

司会 ・・ 奥平明観

通訳 大武光・于 ・・

でパターン化治療の問題性を指摘し、また、病症の反応は多層性で7層にも及んでいること、

『傷寒論』の記述は腰痛治療においても重要であること、運動診による変動経の把握が出来ること、など等を論じた。

☆脈診が不得手であっても、正確な経絡変動の把握と、経絡運用の治療は出来るものである事を、塾で積極的に講義しはじめる。(1991年)

☆新しい配穴体系の提唱

外因に対応した取穴の原理

内傷の場合の配穴の原理

内傷病の場合には病理的産生物(痰・飲・瘀)と「虚火」を処置する特殊配穴が必要なこと、および、季節要因・外感要因に配慮した配穴(間接的瀉法の問題も含めて)

(第一次-1985年、第二次-1989年、第三次-1991年)に塾内や親しい鍼灸界の友人に発表。
この頃より「直接瀉法」と「間接瀉法」の区別の必要性とその配穴および手技について論じる。

☆「気」は鍼灸医学にとってシャープな語彙概念において限定的に用いた方がよい事を主張するようになる(1991~1992年)

☆刺絡学会の創設(1994.01)に準備の初期(1990年)の刺絡懇話会準備(設立準備委員会から)の頃より参加した。1993.2月より学会監事に就任

☆「汎用太金鍼」について発表(1994年夏季合宿)~昭和53年(=1978年)頃から、太い金鍼を臨床において時には試みに用いるようになっていたので、鍼の形態と鍼法手技にいたるまでが基本的に出来上がるには16年を要している。

☆「東洋鍼灸専門学校」講師(1991年~1993年専修科)

1994年秋よりは一般生徒の学科担当(1994年は鍼灸実技・鍼灸理論担当)

(95年は東洋医学概論・鍼灸実技・鍼灸理論担当)

☆「日本経絡学会・23回学術大会」で実技シンポジュームのシンポジストとなり、近年の主張を積極的に、実技の開示に平行して展開した。

病蔵に応じた配穴・病理的産生物に応ずる配穴・病因の五行に対応する配穴・直接的瀉法と間接的もしくは迂曲した瀉法を論ず H7.09.15 追加記述

☆15期入門講座を臨床歴3年以上のものに限った対象者にして1年間の予定で10月より開催・

聴講者は10名

病因診定法と病因に応ずる配穴原理論・尺皮診に言う五行は主に病態を示す事を指摘・病態に対応する取穴を論ず。 追加 1996.01.07

- ☆文部省・筑波大学主催の「盲学校理療科教員夏季研修集会」にて3時間の講演。文部省よりの講演要請・日本経絡学会常任理事会の推挙により出演。H8.7.23 会場はお茶の水の日本歯科医科大学講堂・演題は「古典鍼灸治療の立場から体表所見を論ず」。聴講者の相当部分が盲人との事にて、スライドなどが用いられないので、準備に工夫を要した。この時の講演テープが届けられた。係の浜田氏より、明治鍼灸大学助教授・篠原氏も希望したので送った由である。
- ☆日本経絡学会24回学術大会に「特別研究発表」を学会準備委員会から要請されたが、会場が大阪であるため体力的に出演の自信が無く、主治医の了解も困難なので出演を断わった。
- ☆日本刺絡学会より第六回学術大会のシンポジウムへの出演依頼を受けた。平成9年3月30日に東京都内で開催される由、シンポジウムは「日本鍼灸各派の刺絡の現況と将来」と題される。出演する旨を回答して準備に入る。 追加 1996.06.18
- ☆漢方鍼医会（小泉治雄会長・福島賢治）より11月の全国的研修会で講演するようにと依頼された。「難経の配穴取穴論について」の主題で講演したい旨回答した。
- ☆『鍼灸大阪』誌より平成9年1月号に原稿を書くように依頼された。11月20日の締め切り日にやっと間に合わせた。校正依頼するからとの編集部よりの原稿受取り通知が届いたが、校正用ゲラは12月27日現在到着していない。
- ☆漢方鍼医会（小泉治雄会長・福島賢治）より11月の全国的研修会での講演録音テープの起こし原稿の校正依頼もあったが12月27日現在では到着していない。
- ☆A・「触診・望診・舌診チェック表」、B・「脈診チェック表」の2種類がほぼ完成。「奇経触診・経脈別触診チェック表」、「問診表」が出来れば、基本カルテは全て出来上がることになる。関連して「腹診・候背診などの図」も出来た。今後はこれらを用いて後進を指導しながら、より改善して行くこととする。これで「脈診が不得手でも正しく経絡運用の治療が出来る」と言う年来の主張を、臨床的にも・教育的にも展開するのが非常に楽になる。「証の確定構造」論をまとめる必要が生じている。
- ☆「日本経絡学会」学術部長名で「学会関連研究学術団体学術担当者会議」が平成9年1月12日に開催する旨の招集通知があり、大森の東京衛生学園専門学校で1時～5時に開催される。塾代表者として出席す。学術部よりの要請によって、各会も提出した（水準・記述態度に大きなバラつきが見られた）が要請されたテーマについて、レポート提出、東西両医学の間にあるものは、根本的なパラダイムの違いにある事、それ故に、自然科学の各分野がおしなべてパラダイムの転換や変更の必要を論じているが、わけても物理学会会長の論と吉川教授「細菌の逆襲」は、旧来のパラダイムによる歩みの行き詰まりの深刻さを表明しているものである。それだけに、東洋医学に期待されるものは極めて大きいと自覚した努力が必要であり、その点について論議を重ね、かつ、協力するという体制が重要な事を訴えたが、「空回り」の感は否めなかった。 補足（H9.8.15）

☆H9.10.12の「伝統鍼灸医学会」による「学術研究集会」で、「鍼灸用語についての提言」と題する30分の「教育講演」を学会会長からの依頼があった。島田会長に電話で問い合わせたところ「用語の統一」の要望が強いので依頼したいと言う返事であった。今少し相談したり問い合わせたりしたいと回答した。「証討論の中間総括」を書いたときに「用語概念の問題」に多少触れたせいであろうか？

☆漢方鍼灸会の福島賢治氏より、明年2月の講演の演題を具体的に決めてほしい旨連絡があった。苞徳塾の夏期合宿で予定している演題との関連で考えているテーマがあるので、それに関連した話では？どうかと応えた所『難経』を軸に話して欲しい由であった。後ほどあらためて連絡する事にした。

☆光藤英彦氏（愛媛県立病院）より、八木の学術的な事を知りたい旨連絡されたので近年の若干の塾資料と塾報を送った。丁重な礼状と氏の最近の研究論文2編が送られてきた。

☆

☆